

天正六年高城戦に於ける南郡衆の動向

大塚主

まえがき

ここでいう高城は、日向国児湯郡木城町にあって、小丸川（おまるがわ）の辺（ほとり）の小さい丘の上にある。城地とされる所は現在は公園化されていて「高城趾」の碑が立っている。

この高城は、中世の終末期に、大友氏と島津氏の運命を決した、因縁（いんねん）の土地である。

大友宗麟と島津義久が角逐（かくちく）した、天正六年十一月の高城戦では、大友軍は一方的に潰滅して、それより、急転直下滅亡への運命を辿ることとなった。

更に、十年後、天正十五年豊臣秀吉の島津征伐では、島津義久の主力軍は、ここ高城で最後の抵抗を試みたが、上方軍の数と物には勝てず、決定的な敗戦をし、やがて、義久は剃髪して秀吉の軍門に降り、勇戦した弟の家久は降伏後に急死した。（家久の武将としての才能を恐れた大和犬納言秀長が、毒殺したというのが有力な通説）

これよりさき、天正五年、日向南半を領した都於郡城（とのくりじょう）の伊東義祐（よしすけ）は、島津義久と戦って敗れ、宗麟を頼りとして豊後に援けを求めて来た。日向北半を領していた、土持（現延岡市）松尾城の土持能成（よしなり親成ともいう）は、南の支えを失ったので島津義久に寝返った。

これに怒った宗麟は、天正六年三月、大軍を送り、能成を松尾城に破り、逃げるを追って行騰（むかばき）神社で捕え、豊

後の浦辺で殺した。

この時には島津義久は、土持能成の救援が出来ず、あたら盟友を見殺しにしてしまった。すなわちこの天正六年三月の時点では、大友氏と島津氏の實力の差は、このように、大きく開いていたと見なさねばならない。これに氣を良くしたのか、宗麟はこの年の七月二十五日、正妻の奈多氏（イザベル）を離婚し、侍女のジュリヤと結婚したイザベルは奈多八幡大宮司奈多鑑元の女で岡城主志賀道身の妻はその娘である。続いて、臼杵の教会で、カブラル師について洗礼を受け、ドン・フランシスコと称した。

武士は神仏の加護によって、戦場に於ける安心立命を得る。宗麟が異教徒となったことは、神仏の敵となったことで、大友義鑑の育てた大友軍の主力である、戦場往來の家臣団の忠誠心を逆撫ぜするものであった。

その三ヶ月後に、この家臣団の反対を押し切って、再び日向出兵を発令した。豊筑肥六ヶ国、それに日向半国、伊予半国に對して動員令を下した。これまでの大友宗麟は幸運児であって、天文十九年、父の義鑑の横死により、家督を継いで以来、戦って敗れることを知らなかった。だから、日向出兵に当たっても、義久をば取って食ったと思っていたに違いない。

一 十字軍氣取りの大友宗麟…大手軍

―高城戦を大友方より見る―

天正六年の第二次日向出兵の最高指揮官は宗麟であったのか、その子の義統であったのか、明確にしない面もあるが、その作戦は実に壮大である。

1 伊東氏残党により後方攪乱作戦

2 兵力六万と称する大手軍の南下作戦

○宇目↓梓峠（あずさとうげ）↓北川（国道三二六号）

○佐伯↓屋ヶ峰(宗太郎付近) ↓北川(国道十号)

両道を進んだ軍は北川下流の「竹の串」に進結して、田原紹忍を主将として高城に向う。

3 兵力二万と称する南郡衆は肥州路より迂回して搦手(からめて)軍となり、高城を背後より襲う。

大友宗麟は、この作戦で島津義久を打ちのめすことが出来ると信じて、戦う前より、戦勝の喜びに酔っていたらしい。

フロイスの「日本史」

「日向の国主は三位殿(三位入道義祐)という名で、自領で持ち得る権利をことごとく嫡子に譲っていたが、いかなる方法によっても、日向国主に復帰する望みがないので、豊後で若干のものを与えられたいと願った。宗麟と義統は領国の安全のため本件を重視して全力を尽すことにした。もっとも、宗麟フランススコの意向はさらに一步進んだところにあった。すなわち、国の統一と、デウスの御名と栄光を拡める点であった。そこで、彼は土持の地に(現延岡市)住居を構えようとし、夫人のジュリヤとともに準備を整え、かなりの軍勢と幾門かの大砲を携えて出発し、その乗船には、赤い十字架を描き、白緞子(どんす)の金の縁飾りを施した四角い旗を掲げた。この旗はインド副王ドン・アンフォンリ・ノロのものであったが、彼に贈られたものであった。」

・カプラル師と三名の修道士は別の船で出発した。

・臼杵港出港は一五七八年十月三日(邦曆天正六年九月三日)

(薩摩情報では、豊後衆はこの日に耳川を渡った。)

・三日位で土持に上陸し、無鹿(むしか)に本宮を置く。

陸路を進んだ戦闘部隊は北川の下流の「竹の串」に集結して南下したが、日時、編成についての確たる史料はない。

・宗麟は無鹿に住居を作り、教会を建て、布教に専念し、社寺を破壊する。キリスト教王国を日向に建てようとし、戦争は佞臣(ねいしん)の田原紹思親賢に任せる。

「：豊後の軍勢が、日向の征服地と被征服地を分つ耳川を渡ると、それは薩摩方を大いに驚愕^{がく}させた。なぜなら、彼らはこの川を自分たちの防衛線としていたからである。：。豊後勢は高城を包囲することに決めた。そこは、薩摩国主の弟（家久）が守備……。薩摩国主は高城を失えば、新に征服した日向国を失うのみならず、自らの薩摩国すら失う危険に曝（さら）されると判断した。最大の迅速さをもって、大軍を率いた薩摩国主は、豊後の山岳からあまり距っていないある嶮山に設けられた陣宮に到着すると、それぞれ敵を攻撃するように命じた。一五七八年十二月四日の火曜日（邦暦天正六年十一月二日）であつた。」

・これに対して、豊後の隊長たちは無能であつた。

・十一月十一日より十二日までの間に豊後勢は殆んど潰滅。

残りは、名貫川・耳川の線でその日のうちに討取られる。

・耳川以北の各城も十三日は薩摩に寝返る。

○かくて、宗麟のキリシタン王国の夢は空しく消えた。

○カブラル師は「主なるデウスは、豊後の人々を罰することを望み給う」と嘯（うそぶ）いていた。

○宗麟に敗報が届いたのは二日後の十四日というが、薩摩情報では十二日夜逃亡。フロイスの日本史では「無鹿の御旗本も十四日に引給う」十四日は邦暦の十二日であるので、逃げ足だけは立派であつた。

かくて、大友軍は全滅し、高城より耳川までの七里の間、死屍は折重るようにして続いた。

二 神に祈る必死の義久

—高城戦を島津方より見る—

鹿兒島県史料旧記雜録（抄）より「大友御合戦御日帳写」「耳川合戦日記云」

天正六年九月十一日

「末の刻、山東へ御行（てだて）の儀に就き、御発足せらる。」

山東は日向山地の東という意味で、児湯郡諸県（むらがた）郡などの太平洋岸平地地方をいう。このあたりで、伊東氏の遺臣が蜂起してゲリラ活動を行っていた。

九月十五日

「野尻城に入る。此の日 霧島・鶯戸・妻霧島三社へ、御祈祷のため仁王經三部講読。酉刻・伊集院忠棟が書状をもって、石に就いての行（てだて）が昨十四日出発したと注進。」

石の城は、小丸川上流の秘境にある。六月に、伊東の遺臣長倉勘解由左衛門祐政という長い名の勇士が、島津の拠点都於郡（とのくり）城・佐土原城に近く、天然の要害である石の城を築いて入った。義久は伊集院忠棟を大将として討たせたが、七月六日の戦に大敗し、五百余人の死傷者を出して佐土原に引いた。

義久は一族の島津彰久を大将とし大軍を投入した。勝敗はつかなかったが、城兵は食糧が尽きたので門川城に去った。

九月二十六日

「山東綾（あや）の米良備前守より使僧をもって、豊後衆耳川を渡ると注進」

綾町付近は伊東の遺臣が再興に動いている地方である。それだけに豊後の情報が敏感に伝えられていたのであろう。

九月二十九日

「大口の新納武蔵守より書状、大方の趣は大友宗麟に日向表への一行（ひとてだて）の企がある。しかし、日向口だけでは効果が無いので、肥後口の衆を頼み思う由」

新納武蔵守忠元は薩摩を代表する武将である。義久は日向作戰を行うに当り、肥後口の押えとして、玖摩の相良義陽の人吉

城に近い大口に配置した。相良義陽は義久の勢力の強大化するのを恐れて、宗麟に急接近したのであるが、豊後よりの情報是最も警戒を要する新納忠元に洩れていたことになる。だから大友氏の動きは島津に筒抜けつつぬに通じていた。

九月晦日

「石の衆長倉勘解由左衛門始め悉く三城に送り遣られ候……此の晩、佐土原より鎌田尾張守申上げられるには、一昨日二十
八日三城衆耳川を渡り、ぴしやご岳に打居たる由……」

三城とは、耳川以北の門川・日知屋・塩見城のことで、大友の武将と、伊東の遺臣が守る南進拠点である。ぴしやご岳とは浅付山のこと、現日向市の小さな丘らしい。

門川城 米良四郎右衛門尉（伊東遺臣）

塩見城 右松四郎左衛門尉（伊東遺臣） 日知屋城、不明

十月十四日

「太守様、石の儀御勝利により御帰陳（陣）」

天正六年戊寅十月二十五日

「山東の高城より、大友家近陳を取構え、内端（うちわ）の往来も輒（たやすか）らずと注進あり（義久）此の日巳の刻御
発足）（午前十時 船にて鹿児島出港）

日州財部の使僧太平洋寺の申さるる趣は、高城へ近陳の上、三納（みのう）は地下人悪心により、去る二十三日に敵が支
う。その他、平郡（へぐり）平野城も焼落ち、八代、綾（あや）本庄城籠も各々同じく裏里うらざとにも悉く放火致し、煙の立つ
様子が都於郡（とのくり）佐土原・木脇より見えた、ということが披露された。」

高城に大友軍が犇々と押寄せるのを待かねたように、伊東氏の残党が再興の火の手を挙げた。現在の西都市や綾町など、旧伊東勢力の中心地である。このゲリラ部隊は千余人にも及び、石の城の勇士長倉勘解由左衛門が再び現われて氣勢を煽った。

残念なことに、大友軍の指揮系統が欠陥だらけで、ゲリラ部隊の支援が出来ず、島津軍により制圧されてしまった。

十一月二日

「義久 佐土原城着、警固五千人、出迎えの将士数万」

十一月三日

「御一家、国衆・一所衆・地頭悉く御宿に祇候（しこう）。此の日一日中終日の御評議。」

三日・四日・五日・六日・七日・八日と終日雨で、大洪水であった。この間 島津軍は終日軍議を行った。大敵を前にした義久は必死である。

宗麟はどうであったのであろう。敵を侮り、戦う前に、戦勝の美酒に酔い痴れていた。

十一月九日

「敵陣の通路に野伏を懸け、夜半に佐土原を出発して、財部城に入る。しかし、近日には吉日が回って来ないので、伏兵についての評議を行った。」

財部は、現在の高鍋（たかなべ）町で、佐土原町とは続いている。十軒位の近距離である。だから、小丸川を挟んではいるが、大友軍の陣地とも近い。そこに島津の大軍が迫っていることを十日間も知らなかったとは、余りにも迂濶（うかつ）な話である。

十一月十一日

「通路の仕役の手立は、往來の懸衆三百程、伏草五百余。田原橋ニの草五百余、築地の本詰の草三千程、十日の亥の刻より打立らる。向野の伏衆は夜明に打出らる。」

義久は綿密な計画を立てて、ばかんとしている大友軍の周囲に兵を伏せて開戦を待った。常識的には、平地で行う遭遇戦は数の多い方が有利である。大友軍は待ち草臥（くたび）れていた。

「往來の懸衆馳出さると見え敵殊の外慌てる」

此の時が、十一日の午の刻、午前十時である。大友軍は初めて島津の大軍が目の前に追ったことを知った。

これより、豊薩十万の大軍が激突したことになる、九州の天下分目の戦とも云うべき、高城戦がはじまった。大友軍は敵の鋒將本田親治・北郷（ほんごう）久盛を討取った。これに気を良くして、高城川原に殺到して押寄せた背後に、勇將島津以久の伏兵が出現し更に準備した伏草が湧き出すように押寄せ、忽ち攻守は逆となり、大友軍は完敗した。

十一月十二日

「未明より 総攻撃」

大體十二時頃までに高城付近の戦は終り、逃げる大友軍を追って、名貫川、耳川と次々と追詰めて討取った。耳川で戦の終った時が、午後四時である。

「申時に勝吐氣を挙げ」

九州に於ける覇者交代の雄叫びである。しかし、此の時の、島津の兵は四千とあるから敵の兵の消耗も甚大であった。

無鹿で敗報を聞いた宗麟は夫人ジュリヤの手を引いて豊後に逃げた。十三日朝、宗麟夫妻の逃走を知ったカブラル師と三人の宣教師も大慌てで逃げた。彼等は、敗走して来る豊後兵の眞の敵はキリスト教であることを知っているからである。

三 幻の南郡衆、搦手軍の動き

—豊後最強の軍団はどうなったか—

南郡衆とは大野・直入郡の武士団のことである。戸次（倍都芸）・一万田、両志賀・朽網（くたみ）、田北・入田（いりた）氏を南郡七家という。（田北学氏の説）

天正六年三月の第一次日向出兵には中心勢力となつて、土持能成を打破した南郡衆は、疲れを養う余暇も与えない、第二次

日向出兵には反対であった。宗麟が無鹿に住居を作っても、豊後の兵が高城を囲んでも動かなかった。しかし、高城を挟んで豊薩の戦機が熟して来た頃、義統の説得に応じたらしい。

相良文書

「志賀道輝・朽網宗歴・同南郡衆の事、於干今者、到其堺、可為着陳候。最前以来如申談候。別而以御三ヶ国、属御案中候様、一行之儀頼存候。度々如申談、吉兇共義湯御覚悟前候。猶実相坊申含候。恐々謹言

十一月一日

義統 在判

相良殿（義陽）

日付の十一月一日がどのような日かはっきりしないが、南郡衆の説得に応じた日か、出発した日であろう。この日は、義久の大軍が、佐土原に到着して高城に頭を出した日である。日向は二日より十日まで大雨で洪水であった。日向が大雨であれば、山岳重畳の肥州路の行軍は不可能である。時は初冬で、海拔千米以上の山岳を越す道は雪であったかも知れない。

南郡衆が辿った肥州路とは、相良氏に「其堺に到り」とあるから、一ツ瀬川の上流の米良（めら）、今は村所（むらしよ）を通る道であろう。肥後の馬見原↓椎葉↓村所と結ぶ道は、国道二六五号であるが、全くの羊腸の道で、時には海拔千三百米もある高所を二度も越す。

米良（村所）よりは、一ツ瀬川（児湯川）に沿った米良街道を下れば杉安峽を通過して西都市の三納（みのう）に出る。これより那珂城・宮崎城・浅岡砦に入ったわけであろう。

大友義統がきめた大手軍と搦手軍が一斉攻撃に出る「日限の日」は史料として残っていない。恐らくは、義久の総攻撃の十一月十二日以後であろう。だから、大手軍は、高城を囲み乍ら荏苒（じんぜん）として日を送っていたのではなからうか。いづれにしても、兩軍とも、日向作戦はスローモーションであった。それが、鹿児島に一旦は引返した義久が、今度はフルスピードで、高城に馳けつけて、勝負に出たことは、南郡衆の動きをキヤッチしたからであろう。

南郡衆が、ハンニバルのアルプス越えのように、山岳を抜け出して、日向の山東平地に出た時には、豊後の兵は敗れて姿を消していた。確に、義久は勝者として残っていたはずであるが、薩摩の史料には南郡衆の動きは一言半句も記されていない。豊後の史料にも、日向の史料にもない。

不思議なことに、宗麟よりタイトルを奪った、義久は天正六年末と天正七年には兵を動かしていない。兵の休養と兵器の整備の為の期間に充てたのであろう。

だから、新手の精銳南郡衆と、戦い疲れた義久との出会いがなかったことは、老獪（ろうかい）な義久に巧く外されたということになる。その後の南郡衆を史料によって追うと、

○天正七年の加判衆の名に、志賀道輝・朽綱宗曆（歴）、一万田宗慶の名がある。何れも八十才に近い高齢者である。高城戦に家臣団の殆んどを失った義統は無庇で残った南郡衆の老骨の起用を余儀なくさせられた。

○高城戦で、宗麟が負けたとなると、各地で反旗を翻がえした。

天正七年秋月種実を討つ軍は、志賀道輝・田北紹鉄、朽綱宗歴・戸次鎮連、一万田宗慶と志賀道易（越後入道鑑隆で南山城主）で、すべて日向より帰った南郡衆である。）

○しかし、精銳部隊は日向に残った。幻の南郡衆とは、史料として残らない此の部隊を指す。

大友家文書録

「是春、義統於日向、諸縣（むらがた）等諸城、浅岡、那河、宮崎等諸城砦、増守兵使志賀入道々、駅俗名親教惣監之、以備薩州」是春とは天正八年。この年になると薩摩は肥後経略に動き初め、特に新納忠元の動きが活発となる。

○薩摩軍略記（要旨）

「天正七年 島津凶書助に命じ日向表に働かしむ、天正八年三月日向国浅岡城を攻む。軍利あらず云々」

○古本九州軍記（要旨）

「天正八年、島津図書頭・新納忠元、日向国宮崎に着陣、豊後勢は児湯に着陣」（志賀道易は杉浦と云う所、浅岡の砦に戸

次鎮秀入道と足達左衛門）

○太宰管内誌日向篇（要旨）

「天正八年三月上旬、島津図書頭・新納忠元に八千の兵をつけ宮崎に遣る。浅岡の城将、戸次宗傑…云々」

以上の記述が「豊薩軍記」となり「大友家文書録」の説明文となった。しかも、確かに間接的には、南郡衆の動向を決める史料とは言えるが、史実であるという直接的な史料でない弱みがある。

又、宮崎城、那珂（珂）城は存在が地名として現存するが、浅岡の砦のあった所は現地で確認出来ない。杉浦は西都市の何処かとは思える。これだけでは天正六年より九年までの間の岡城主志賀道易親教と鎧岳城主戸次宗傑鎮秀は行方不明ということになる。それだけではない。田北氏の記録の中には、岡城主が日向に出陣した時は、後のドン・パウロこと志賀親次は僅に十一才の幼年であるので、義統の強い要請で、田北紹哲が、天正六年より天正八年二月まで、岡城に入ったとしてある。この説明も微妙になる。

大友義統感状

大友家文書録

……財部表、敵取出候処、吉弘左近大夫懸口及一戦候刻、其方別而碎手軍勞之由候乍案中□入候、弥馳走専一候……

天正八年 卯月十一日

義統在判

吉弘中務少輔殿

（大方同文）

卯月十一日

義統在判

小田原主膳允殿

この財部表とは、浅岡の砦のことであろう。これは野史の説明と一致する。吉弘中務少輔の本領ははっきりしないが、現在

山香町日指で、同所の田北氏の給人の中に四段所有の名がある。日差田北氏は高城戦で戦死した。田北鎮周の支配に在ったが何かの理由で南郡衆に属したのであろう。小田原主膳允は直入郡の給人の中にその名はないが、小田原氏は直入に給地を合計百四拾町持つ給人であるので、志賀道易に属して出陣したと思える。

いずれにしても、この文書により南郡衆の天正八年に日向に存在したと云うことが、史料的に確認出来た。従って、野史の記述が事実で、鹿兒島県史料にはこの点が不足していたことになる。

四 織田信長の停戦命令と南郡衆

—豊薩のいずれが得をしたか—

信長「御文書」 鹿兒島県史料 旧記雜録後篇

「連々以面拜如申入、大友与島津干戈之段、不可然存候、所詮、令和睦尤候、大坂落着之条、来年者出馬、毛利可追伐候、其刻双方別而粉骨、对天下可為大忠候……………」

(八月十二日 信長)

上書 近衛殿 信長

(此書御譜中に有之 左に写置く也)

(義久公御譜中)

「天正八年庚申正月二七日、伊勢因幡守去年八月十二日、織田彈正忠信長卿贈書簡於近衛殿(前久) 又賜義久、共与豊後和平之媒書也、带来今日授 記左」

此文書によると、信長の停戦の媒書は天正七年八月十二日に出されているが、伊勢貞知により、義久に届けられたのは、天正八年正月二十七日という意味であろうか。

此の時点で、大友・島津の対立は、日向に於ける南郡衆の戦いだけである。同じように和平の媒書は、大友氏も受けた。これは義久の場合とは異なる。

織田信長朱印状 大友家文書録

「依勅定染筆、仍閑東不残、奥州之果迄、被任倫命天下静謐処、九州事干今銚楯之儀、不可然候条、国郡堺目相論、互立存分之儀者、被聞召届、仰出候、先敵味方雙方共、可相止弓箭之由……」

覚

七ヶ条(略) 以上の条目は異儀に及ばず請くべし

九月十三日 (織田信長) 御黒印

大友左衛門督殿 (義統)

大友左衛門入道殿 (宗麟)

この停戦命令は、天正七年九月十三日に出され、天正八年の初めに豊後には届けられたと思える。この信長の文書をどのよ
うに受取ったかを示す史料は全然無いが、無視出来なかつたことは、日向に於ける両軍の間に決定的な戦闘が行われなかつた
事により推理出来る。

大友家文書録

「天正九年三月、島津図書頭忠長、新納武蔵守忠元、日向宮崎に至る、志賀道^{ちが}駅等之と対陣す。義統・利光越前入道宗魚俗
名鑑教を遣り、道折を救う。」

何故、この時に薩摩方が軍を動かしたかを知るべき史料はない。利光宗魚は戸次の利光城主で、南郡衆である。恐らくは戸
次宗傑の手に属していたのである。道折(どうたく)は道易の弟で、浄閑親教のことであるが、誤読であるかも知れない。
「是春、義統は華岳春院(使僧)を薩州に遣る。去年、織田信長の和平の勧めによるものである。」

四月九日、宮崎薩兵大いに浅岡壘を攻む、戸次宗傑、足達左衛門が良く防ぐ、薩兵・杉浦に退陣。

四月二十五日 豊軍は杉浦で大いに戦い敗潰、是より、日州悉く島津の旗下に入る」

和平交渉の最中に、勇ましく戦争が行われたが、不思議に戦死者は出ない。

島津義久よりの和平の使者は天正九年八月に到着した。

大友家文書録

「去歲以京都御媒介、両国和睦之儀、無厭布任其筋干今本悦候、然者為右之祝詞、過春花岳院下着、御懇志至候、寂早速可致報礼之処、遅怠背心緒候、倍無□□可申承事、所庶幾候、仍太刀一腰金、馬一匹進之候、猶大慈寺西堂可有相違候 恐々謹言

天正九年 八月二日 修理大夫義久 在判

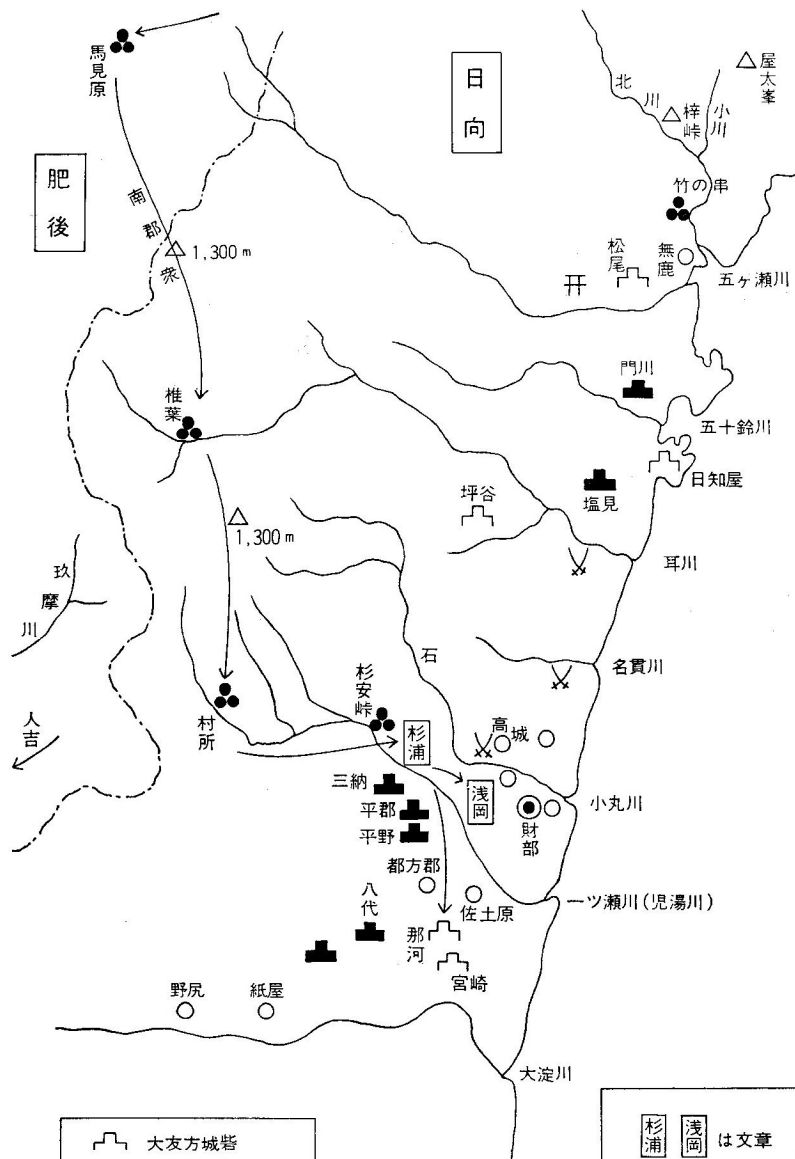
上 大友左兵衛督殿（義統）





信長よりの和平の媒介は、戦い疲れている島津軍にとっては、次の戦争の準備に充分のゆとりを持たせる期間を置かせるものであった。しかし、大友軍にとっては、九州探題といった支配体制の崩壊を促進する材料であった。宗麟には往年の力はないと、戦国時代という、次々と風雲児を生む世相の中で評価されては、老大国の撓（しな）えゆく運命を如何ともする事が出来なかった。



敵中に孤立して二年間も健闘していた、志賀道易・戸次鎮秀などの南郡衆は、敗れることを知らぬ大友軍の再現を期待していた。それだけではない。島津の隣国、阿蘇氏、甲斐氏、相良氏もここで大友氏に頑張ってほしかった。

甲斐宗運書状 （大友興廃記）

「今度高城一戦之儀、不及是非奉存候：然処此度一番槍被得勝利二度目之軍儀者肥州・日州両国十万人之人数、手合之日限相違故如此成行事古今不珍軍之習其勝負之事ニ候、随而肥州表之諸士、如前々不存疎意様、可申談心底ニ御座候：恐々謹言



 大友方城砦
 大友方伊東遺臣
 島津方城砦
 南郡衆進路?

 杉浦  浅岡 は文章より位置を求めたので現地名としてはない。

天正六年十一月廿一日 甲斐宗蓮

志賀兵部入道殿（宗易）

主として参考にした文献

フロイス日本史 豊後篇

大友家文書録 大分県史・竹田市史

鹿兒島県史料 旧記雑録抄中「大友御合戦御日帳写」「耳川合戦日記云」

大宰管内誌 日向篇 薩摩篇 等

協力を受けた機関

鹿兒島県立図書館・宮崎県立図書館・佐土原町教育委員会・西都市教育委員会 等々

会 告

※ 会費のご納入は、次のいずれかでお願ひ致します。

(1) 郵便振替口座 下関八・五・二・九・四 大分県地方史研究会あて（振替口座が変更になりましたので御注意下さい。）

(2) 大分銀行県庁内支店・普通預金口座 一・六・四・三・二・一 大分県地方史研究会あて

※ 会員の方で、本誌以外に論文等を発表された時は、抜刷等を本会あてお送り下されば幸いです。また出版された時は、チラシか出版物をお届けいただければ、販売のお手伝を致します。